

2 学年国語科学習指導案

授業者 古川 泰也

- 1 日時 平成16年10月5日(火) 5校時
- 2 学級名 2年1組(男子21名女子18名計39名)
- 3 主題 単元三 心のきずなをとらえる から「字のないはがき」
- 4 主題について

(1) 単元について

本単元は、読むことを通して、人と人のかかわり、社会、平和、人の持つ想像力の素晴らしさや愛情の強さについて考えることを学習のねらいとしている。本単元は第一教材「ゼブラ」、第二教材「字のないはがき」で構成されており、ともに登場人物の様子や状況が効果的な表現で表されている。それぞれの構成や表現の特徴に注目させながら登場人物の心情に迫っていきたい。

第二教材「字のないはがき」は中学校で学習する初めての随筆である。放送作家であり、小説、随筆にも多くの作品を残した向田邦子の作品である。筆者の目から見た「父」への思い、「父」の行動や姿が描かれている。暴君で表向きは家族に厳しい父の普段の生活からは決してうかがい知れない、父の子供への深い愛情、家族への思い、家族のきずなが見えてくる。また、今まで知ることのなかった父の優しさや深い愛情を知った筆者の喜びや感動、そして今は亡き父への筆者の深い思慕と敬意が簡潔かつ凝縮された文体にこめられている。生徒と同じくらいの年齢の筆者が体験し感じたことや後年懐かしく当時を回想する筆者の思いがあり、生徒にとって親しみやすく豊かなものの見方や考え方を育むことにもつながるであろうと考えられる。

学習指導要領の「C 読むこと」の指導事項である、「表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」が明示されている。本教材の文章は簡潔で短いため、生徒は抵抗なく読むことと思われるが、生徒は登場人物の心情理解のみに終始したり、戦争の悲惨さのみに関心が集中しすぎたりしてしまう恐れがある。しかし、本教材はあくまでも随筆であり、単元名は「心のきずなをとらえる」ことに着目すると、文章中の叙述に根拠を持って筆者のものの見方、考え方、感じ方を読み取ることが重要である。また、読み取った内容や筆者のものの見方、考え方に対する生徒自身の考えを交流することで、相手の考えの良さの発見や自分にはないものを発見させ、さらに自分の読みを深めていくことが大切である。よって、自分の考え方を話したり様々な考えを聞いたりする場面を設けることで、一人一人の読みをより確かなものにしていきたい。

(2) 生徒の実態

生徒は全体的に学習に対する意欲は高く、課題を解決しようという態度もみられる。自分の考えをノートに記述することなども積極的に取り組む生徒も多いが、自分の考えを発表する場面では自分から発言する生徒が限られてきている。「書くこと」については、発問に対してじっくりと考えを整理して書く生徒が多い。「読むこと」については、文章の構成をもとに読み取るとは得意な生徒が多いが、文章中の叙述や細かい表現に根拠を求めるまでには至っていない。言語事項の語句や漢字に関する取り組みもおおむね良いが、語彙の少なさが見られる生徒もいる。また、「読むこと」「書くこと」については、生徒間の差が大きいので、補助発問や机間指導などの配慮が必要である。

(3) 指導の構想

生徒たちは本教材で中学校の国語の授業では初めて随筆という文章に出会うことから、導入の段階で生徒たちにとって親しみやすい随筆を複数準備し、随筆に対する興味・関心を喚起したい。そして、文種を明らかにして、筆者のものの見方・考え方を読み取るためには文章中の叙述に根拠をもてばいいという見通しを持たせ、読み取りのスキルを高めていきたい。そのためには学習課題を教師側から提示し、読み取りのための見通しを明確にし、筆者の目から見た父の姿や父に対する思いを考えさせていきたい。また、発展学習として、向田邦子の別の随筆を複数準備し、生徒たちが多読することで、筆者のものの見方、考え方にさらに迫っていくような展開にしていきたい。

5 単元の目標

- (1) 関心・意欲・態度・・・ 作品の優れた表現を味わい、表現の工夫に注目しながら読もうとする。
- (2) 読むこと・・・ 文章の特徴を確認し、文章中における叙述に根拠を持って筆者のものの見方、考え方を読み取ることができる。
- (3) 言語事項・・・ 文章中における語句の効果的な使い方や象徴的な表現・描写に気づくことができる。

6 指導計画・・・・・・・・・・ 11時間

(1) 単元の指導計画

- ・「ゼブラ」を呼んで、象徴的な言葉の表す意味に着目しながら、人物の心情の変化をとらえ、人物どうしの心のきずなについて考えることができる。 4時間
- ・「字のないはがき」を読んで、父の姿に焦点をあて、表現に着目しながら、筆者のものの見方・考え方にせまることができる。 (本時 7/11) 4時間
- ・作品の感想を手紙に書いて交換し、自分の感想を深めることができる。 2時間
- ・感想交流会を開き、自分のものの見方や考え方を広めたり深めたりすることができる。 1時間

(2) 教材の指導計画

補助教材として様々な筆者の随筆を読み、文種の確認と随筆の読み方の見通しをもつことができる。 1時間

父の姿に着目しながら、叙述に注目して全文を読み、筆者の目を通した父の姿や筆者のものの見方、考え方に迫ることができる。 (本時 1/2) 2時間

向田邦子の他の随筆を読み、筆者の父に対する思いやものの見方、考え方にせまることができる。 1時間

7 本時について

(1) 本時の目標

- ア 課題の内容を理解し、叙述に注目することによって課題解決しようとする。(関心・意欲・態度)
- イ 筆者の目を通した父の姿にまつわる叙述を根拠にしなが、筆者のものの見方、考え方を理解できる。(読むこと)

(2) 研究主題にかかわる本時の構想

ア、課題提示の工夫

- ・父の姿に着目した課題を提示することで、課題解決への見通しをもつことができると考えた。

イ、学習過程の工夫

- ・学習プリントの活用により、課題解決への見通しをもちながら作品に近づくことができると考えた。
- ・他の意見を聞くことで、自分の考えを深めさせることができると考えた。

8 本時の展開 (別紙)

9 本時の評価 (評価規準表については別紙)

(1) 関心・意欲・態度

- A 文章後半部分の筆者が父の泣く姿を初めて見る部分や父の行動の叙述から、筆者が普段見ることのできない父の姿をどのように考えているか理解しようとしている。
- B 文章後半部分の父の行動の叙述から、筆者が普段見ることのできない父の姿をどのようにとらえているかを理解しようとしている。
- C 父の姿に関する叙述に着目させ、父の姿をとらえられるよう支援する。

(2) 読むこと

- A 文章中の叙述に着目し、様々な観点から筆者のものの見方・考え方を理解している。
- B 文章中の叙述に着目し、筆者のものの見方・考え方を理解している。
- C 文章中の叙述に着目させ、筆者のものの見方・考え方について、自分の考えをもてるように支援する。

8 本時の展開

 : 学習課題 : 予想される生徒の反応
 関 = 興味・関心・意欲 読 = 読むこと

段階	過程	学 習 活 動	指導上の留意点	評価の場面と 具体の評価規準	教材・教具
導入 5分	課題 作り	1 前時を振り返る	1 父の姿に注目し、普段の父と手紙の父の違いから、筆者の父の見方を確認する。		短冊
		2 学習課題を把握する 父の行動やはがきや手紙から「私」の父への思いをとらえよう。	2 課題のどこに焦点をあてて授業するかを明確にし、理解させる。		
展 開	課題 追 求	3 課題追求 (1) 後半部分 (P 136 L 16) から最後まで音読する。 (2) 妹が帰ってきた時の父の行動から妹への気持ちを考える。 ・幼いのかわいそうな思いをさせてごめん ・悲しい思いをさせた (3) 父の行動を見つめる筆者の思いを考える。 ・あの父が泣くなんてびっくりした。 ・周りのことも忘れて泣くくらい子供を愛していたのだな。 ・父親の愛情の深さを初めて知ることができた。 (4) 筆者がどのような思いでこの「字のないはがき」という随筆を書いたのかを考える。 ・手紙はなくなっただけ、はがきの思い出は今でもしっかりと残っている。 ・父のことが懐かしい ・子供への愛情を素直に表せない父の姿が懐かしくて書いた。 ・日常、暴君でも本当は愛情深い父の思い出を書きたかった。 ・父のことを書くことで父とともにいると思いたかった。 (5) (4) についての生徒の考えを交流する。	3 (1) 生徒に音読させる。 父の行動を表す部分に傍線を引かせる。 (2) 父の行動の叙述だけではなく、前時の学習内容もふまえて父の子供たちへの思いを考えるように伝える。 (3) なぜ「初めて」と書いているか注目させ、当時の筆者の思いを考えさせる。 (4) 題名「字のないはがき」にこめられた筆者の思いを考えさせ、ワークシートに記入させる。 ・本文の最終段落の、「あれから三十一年」、「父はなくなり」、「一度も見ていない」に注目させ、はがきのエピソードに対する現在の筆者の思いを考えさせる。 ・随筆の特徴を振り返り、手紙やはがきのエピソードや父の行動を筆者がどのようにとらえて書いたのかを考えさせる。	関：普段見ることのできない父の姿を筆者がどのようにとらえているか、考えようとしている。 読：課題の内容を理解し、文章中の叙述に着目しながら筆者のものの見方・考え方を理解できたか。	学習シート 学習シート 補助 プリント
		38分	ま と め	4 本時のまとめ 3 (5) の意見交流からさらに自分の考えを深める。 5 次時の予告	4 相手の気づいた部分や考えが深まった部分を書かせる。 5 向田邦子の他の随筆を多読し、さらに筆者のものの見方、考え方にせまることを知らせる。
終 結 7 分					

第2学年 国語科年間指導計画および評価規準・具体的評価規準表

紫波町立紫波第一中学校

月	単元名	到達目標	教材名(時数)	評価規準	観点	評価	具体的評価規準	評価方法
9	三 心のきずなをとらえる	作品を読み、その内容や状況を理解し、自分の感想を持つことができる。	ゼブラ 字のないはがき (8時間)	心のつながりや人と人とのきずなを考えながら文章を読もうとする。	関	A	・描かれている状況や登場人物の思いなどをとらえ、人と人の心のつながりについて考えを深めようとしている。	観察
						B	・描かれている状況や登場人物の思いなどをとらえ、人と人の心のつながりについて考えようとしている。	
						C	・描かれている状況や登場人物の思いなどをとらえ、自分の感想をまとめられるようにする。	
				文章の特徴や表現の仕方に注意して読み、人間、社会、自然、平和などについて考えを深めることができる。	読	A	・人物の思いや状況を理解し、人間や社会、平和などについて自分の考え方の変容を明らかにして感想を持つことができる。	学習シート
						B	・人物の思いや状況を理解し、人間や社会、平和などについて、自分なりの感想を持つことができる。	
						C	・人物の思いや状況を理解し、自分なりの感想をもてるようにする。	
		文章の表現の特徴や工夫について理解することができる。	言	A	・表現の特徴として、文章中で特別な意味で使われる語句をあげることができる。	観察		
				B	・語句の意味を理解し、作品の中でも語句の使い方の工夫を説明することができる。			
				C	・他者の意見を参考に、表現上の特徴や工夫を理解できるようにする。			
		作品の感想を手紙に書いて交換し、自分の感想を深めることができる。	感想を交換しよう 感想を手紙の形で書く (1時間)	手紙の交換を通して、ものの見方や考え方を深めようとする。	関	A	・手紙の交換によって、他者から学んだ点を明確にして自分の感想を深めようとする。	観察
						B	・手紙の交換によって、自分の感想を深めようとする。	
						C	・手紙の交換の目的を理解し、自分の感想をまとめるようにする。	
手紙文の特徴を理解し、伝えたい相手を意識して事柄や気持ちを明確にして書くことができる。	書			A	・相手、内容、表現を理解し、自分の考えや想いを手紙の形式で書くことができる。	作品		
				B	・相手、内容、表現を考え、自分の考えや想いを手紙の形式で書くことができる。			
				C	・手紙の様式を参考に、自分の考えや想いを手紙の形式で書けるようにする			
手紙の形態について理解して書くことができる。	言	A	・相手や目的に応じて、文章の形態や展開に違いがあることを理解し、適切な表現で書くことができる。	作品 観察				
		B	・相手や目的に応じて、文章の形態や展開に違いがあることを理解して書くことができる。					
		C	・相手や目的を明確にし、文章の形態や展開に注意して書けるようにする					

月	単元名	到達目標	教材名(時数)	評価規準	観点	評価	具体の評価規準	評価方法
10	三 心のきずなをとらえる	感想交流会を開き、自分のものの見方や考え方を広めたり深めたりすることができる。	感想の深まりを伝え合おう 感想交流会を開く (2時間)	話の中心や付加的な部分、語句の選択などに注意しながら話したり書いたりすることができる。	話聞	A	・話の中心と付加的な部分など内容に応じて語句を選びながら適切に話すことができる。	観察
						B	・話の中心と付加的な部分など内容に応じて語句を選びながら工夫して話すことができる。	
						C	・話の中心を明確にして語句を選びながら話すことができるようにする。	
				感想交流会に参加することで、自分のものの見方や考え方を深めようとする。	関	A	・聞き手にわかりやすく工夫して話すとともに、交流会で出た意見や講評から学ぼうとする。	観察
						B	・聞き手にわかりやすく話すとともに、交流会で出た意見や講評を進んで聞こうとする。	
						C	・聞き手にわかりやすく話すための方法を理解し、聞き手を意識して話すようにさせる。	
			場にふさわしい話し方や言葉遣いがあることを理解して話すことができる。	言	A	・場にふさわしい話し方、言葉遣いに注意して適切に話すことができる。	観察	
					B	・場にふさわしい話し方、言葉遣いに注意して話すことができる。		
					C	・場にふさわしい話し方、言葉遣いがあることを理解し、注意して話せるようにする。		
			感想交流会で感想を発表したり、参加者から感想や講評を聞いたりきる。	話聞	A	・他者の感想から、自分が気づかなかった点や違う点を聞き、自分の考えについて新たな課題や気づきを明確にして聞くことができる。	観察	
					B	・他者がどんな感想を持ったか、自分が気づかなかった点や自分と違う点に注意しながら聞くことができる。		
					C	・他者がどんな感想を持ったかを聞き、自分が気づかなかった点や自分と違う点はどこかを聞き取るようにする。		